

論文の和文要旨

論文題目

日本語の補助動詞研究—「～テアル」形式を中心に—

氏名

李京保 (イキョンボ)

本研究は、補助動詞「～テアル」形式を、語レベル、文レベル、連文レベルという三つのレベルにおいて分析・記述し、さらにそれぞれのレベルで明らかになったことが相互にどのように関わりをもつのかを追究するところに主なねらいがある。

第一章の語レベルでの考察における主な論点は、①「～テアル」を下接する動詞には如何なるものが現れ、それらの分布はどうなっているのか。②そのような現れ方の背後にはどのようなことが作用しているのか。③「～テアル」を下接する動詞は相互にどのように関係しているのか。④「～テアル」を下接する動詞の語彙的な意味と「～テアル」形式の意味の間には如何なる相関性があるのか、という4点である。

「～テアル」を下接する動詞は基本的に他動詞・意志動詞でかつ変化を捉える動詞ではあるが、さらに詳しく見ると、動詞のタイプにはかなりの偏りがある。その使用分布の偏りには、「～テアル」を下接する動詞の性質、本動詞アルの意味の反映、さらには類似的な意味機能を果たす「～テイル」形式との有機的な関係などがからみあっている。具体的には、変化を捉えないか捉えにくい他動詞、抽象的な変化を表す他動詞・使役動詞、《様変え》の他動詞は「～テアル」形式を下接しにくいことが分かった。一方、《設置・付着》(置く、かける)、《書記》(書く)《つくりだし》(ほる、建てる)という二格をとる物の変化他動詞は「～テアル」形式を下接しやすいことが明らかになった。

また、本稿で21種類に分類された動詞は、連語構造上から五つに、さらには具体的・物理的か抽象的・心理的かという変化の質の面で2つに集約され、またそれらは対立している

ことを述べた。「～テアル」形式の意味は「～テアル」を下接する動詞の語彙的な意味と密接に関係してはいるが、「～テアル」形式の意味全てを説明するには文単位で考えなければならないことを指摘し、本稿で認める「～テアル」形式の意味として、〈存在様態〉、〈結果状態〉、〈経験所有〉を提示した。

文レベル（第二章）においては、「～テアル」を述語とする文のタイプとして如何なるものが類型化でき、それらはどのような意味機能を表しているのか。そして、各文の間には如何なる関連性があるか、ということが主な論点である。

〈存在様態文〉は、「(場所)に(物)が～テアル」構造をとり、一定の場所に一定の物が如何なる形で存在しているかを表す(例、「机の上に本が置いてある」)。〈結果状態文〉は、「(物)が～テアル」構造をとり、対象の変化後の状態を表す(例、「さつまいもが茹でてある」)。〈経験所有文〉は、「(人)は{……}～テアル」構造をとり、話し手の内面上に実現済みの行為が経験として内在(意識)していることを表す(例、「私は花子にそのことを頼んである」)。この三種の「～テアル」文の構文的な特徴をまとめると、次の表のようになる。

	焦点	状態の引き起こし手	述語として現れている動詞
存在様態文(74.8%)	在りか (対象)	非明示で、かつ意識が希薄	二格をとる客体変化他動詞(設置・ 付着、書記、つくりだしの一部)
結果状態文(8.5%)	対象	非明示だが、含意	二格をとらない客体変化他動詞
経験所有文(15.1%)	所有者	所有者と一致	相手変化他動詞、主体変化他動詞、 客体変化他動詞

「～テアル」形式は、その前身である存在動詞「アル」から補助動詞へと文法化されてきたものだが、その文法化は段階的である。つまり、存在様態文の「～テアル」の意味は典型的な「アル」文の意味をそのまま継承したものであり、結果状態文は典型的な「アル」文の意味のうち、物の存在の意が抽出化し、さらに、経験所有文は物理的な意味から心理的な意味へと抽象化している。そして、三種の「～テアル」文は、均等に現れるのではなく、存在様態文が全体の74.8%という圧倒的な割合を占めている。それは、「～テアル」形式が存在動詞「アル」から補助動詞への文法化の度合いが低いことを示唆しているといえる。

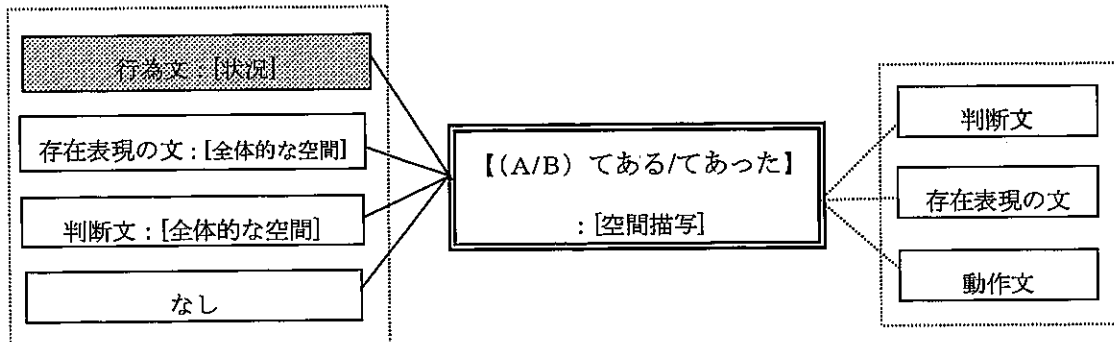
連文レベル（第三章）では、「～テアル」文が文章(テキスト)の中でどのような文と連文関係をなし、そこにはどのような連文構造が見出せるのか。そして、その連文構造の中で「～テアル」文は如何なる役割を果たしているかを解き明かすというところに重点をおいて

分析・記述した。

「～テアル」文がとりこまれる連文として、＜空間認識描写型＞＜説明・解説付加型＞＜推量判断叙述型＞が認められた。それぞれの連文構造は図式化して示すと以下の通りである。

(図式の中で、「～テアル」文のタイプを存在様態文は「A」、結果状態文は「B」、経験所有文は「C」で示す。)

●＜空間認識描写型＞の連文構造

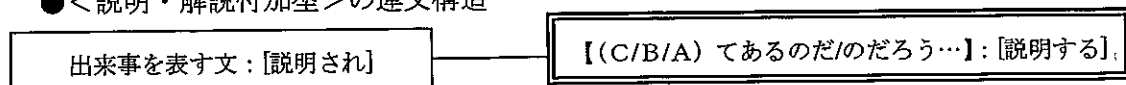


(先行文脈)

(展開)

例) 六は咄嗟に台所に入ると庖丁をさがした。台所には出窓があり、窓は開いていた。そして出窓の木組の棧に俎と出刃庖丁が立てかけてあった。六はその庖丁をおろして右手に握った。 (美しい城)

●＜説明・解説付加型＞の連文構造



例) 「大丈夫だよ。場所は考えてあるんだ。昔のおれたちのトバだよ」 (新橋烏森口青春篇)

●＜推量判断叙述型＞の連文構造



例) 医者は廊下を足早に歩いた。長身にまとった白い診察衣をひるがえしながら、立ち止って挨拶する患者に、短く、「おう、まだいたのか」と声をかけたり、肩を叩いてやったりした。そんな態度は運動部のキャプテンをつとめる学生をおもわせた。この男の机の前には、「威アッテ猛カラズ」といった標語が貼りつけてありそうだ——。 (海辺の光景)

空間認識描写型では、「～テアル」文は、文脈(接続関係にある文)の述べる出来事に対してある空間を認識し描写するという意味機能を果たしている。文脈は、最も多く現れる行為文の場合は状況として、存在表現の文や判断文の場合は「～テアル」文の表す空間に対し

て全体的な空間を提示している。説明・解説付加型は、「説明される部分」と「説明する部分」という構造をなし、文脈の述べる出来事に対して説明や解説を付け加えるという意味的な関係で構成されている連文である。推量判断叙述型は、「根拠」と「推量判断」という構造をなし、文脈の述べる出来事から推量判断を引き出すという意味的な関係で構成されている連文である。

空間認識描写型では「～テアル」文は先行文脈とも接続関係を結ぶとともに、判断文、存在表現の文、動作文へと展開している。一方、説明・解説付加型や推量判断叙述型では、「～テアル」文は主に先行する文脈とのみ接続関係を結ぶ。三種の連文それぞれの接続の仕方によって、図に示したように、「～テアル」文における述語の形は影響をうける。

以上、「～テアル」形式をめぐって、語（動詞）レベル、文レベル、連文レベルで分析・記述した内容をもとに、第四章では、動詞と文、文と連文の相互作用の現象をめぐって、具体的に記述した。まず、語（動詞）レベル、文レベル、連文レベルにおいて分析・記述した内容を照らし合わせてみると、次のようにまとめられる。

語（動詞）		文	連文
客体変化	二格をとる動詞	存在様態文	空間認識描写型
他動詞	二格をとらない動詞	結果状態文	
相手変化他動詞		経験所有文	説明・解説付加型
主体変化他動詞			推量判断叙述型

それぞれのレベルで記述された内容は一対一に合致するには至っていないが、関連が深い。それは、動詞が述語という文においてかなめとなる構成部分（要素）であり、文はまた連文において構成部分である以上、それらは無関係に存在するのではなく、相互に働きかけあったり、一方が他方に積極的に働きかけたり、働きかけられたりするからである。

具体的な現象として次のことが挙げられる。動詞と文は、基本的に相互に作用する。具体的には、①存在様態文における述語として、《設置・付着》、《書記》の出現度数が多いこと、②結果状態文において述語として在りかの二格をとらず、物の変化を捉える動詞（《様変え》《つくりだし》《除去》《放置》）が現れていること、③経験所有文において述語として現れる動詞に制約がゆるいこと、④相手変化他動詞や主体変化他動詞が存在様態文と結果状態文の述語として現れていないことが挙げられる。

しかし、場合によっては、全体としての文がその部分をなす動詞に積極的に働きかけて、

部分としての動詞の本来の姿を変えさせたり、結果として動詞に新しい意味が付与されたりすることがあった。その具体的な現象として、存在様態文において二格をとらない動詞（例えば、乾かす、たたむ、冷やす）が述語として現れ、臨時的に設置・付着の動詞と同じ意味・用法を表すことが挙げられる。

文と連文の関係をみると、文の性質によって文章での接続関係を構成する能力が異なるため、基本的に文が連文構造を決めると考えられる。その具体的な現象として、①存在様態文・結果状態文が空間描写認識型の連文の部分として現れること、②空間認識描写型の連文が判断文、存在表現の文、動作文へ展開することが挙げられる。

一方で、連文構造が文に働きかける場合もある。その具体的な現象として、①連文の構造によって経験所有文に効力・準備という意味あいが付加されること、②説明・解説付加型の連文に三種の「～テアル」文（存在様態文、結果状態文、経験所有文）が取り込まれることが指摘できる。

以上のように、語レベル、文レベル、連文レベルという三つのレベルで「～テアル」形式を分析・記述したうえで、第五章では、「～テアル」形式の意味機能と関連する形式、「～テイル」と「～テオク」を取り上げ、語レベル、文レベル、連文レベルで、「～テアル」形式と比較しながら記述した。「～テイル」形式の表す意味機能のうち「～テアル」形式のそれと類似的なものに注目しても、「～テアル」形式の使用範囲は、「～テイル」形式より狭いことが分かる。また、「～テオク」と「～テアル」の両形式を比較してみると、いずれも動詞は基本的に意志的な行為を表す動詞によるものだが、文の構造や連文構造において両形式は異なった振舞をしている。それは、「～テオク」文は、動作性を備えている動詞文、「～テアル」文は状態性を備えている広義の存在表現の文の一種であることの現れだと考えられる。本稿の考察の結果に基づけば、「～テオク」形式は、「～テイル」形式ほど「～テアル」形式に近接していないことが分かる。

最後の終章では、本研究で残された課題を含め今後の補助動詞（「VテV」）研究の展望について述べた。